# 小浅間

寺田寅彦

峰(みね)の茶屋(ちゃや)から第一の鳥居をくぐってしばらくこんもりした落葉樹林のトンネルを登って行くと、やがて急に樹木がなくなって、天地が明るくなる。そうして右をふり仰ぐと突兀(とっこつ)たる小浅間(こあさま)の熔岩塊(ようがんかい)が今にも頭上にくずれ落ちそうな絶壁をなしてそびえ立っている。その岩塊の頭を包むヴェールのように灰砂の斜面がなめらかにすそを引いてその上に細かく刺繍(ししゅう)をおいたように、オンタデや虎杖(いたどり)やみね柳やいろいろの矮草(わいそう)が散点している。

一合目の鳥居の近くに一等水準点がある。深さ一メートルの四角なコンクリートの柱の頂上のまん中に

径一寸ぐらいの金属の鋲（びょう）を埋め込んで、そのだいじな頭が摩滅したりつぶれたりしないように保護するために金属の円筒でその周囲を囲んである。その中に雨水がたまっていた。自分はその水中に右の人差し指を浸してちょっとその鋲の頭にさわってみた。

　この火山の機巧の秘密を探ろうと努力している多くの熱心な元気な若い学者たちにきわめて貴重なデータを供給するために、陸地測量部の人たちが頻繁（ひんぱん）な爆発の危険に身命をさらしながら爆発の合い間をねらっては水準測量をしている。その並み並みならぬ労苦は世人の夢にも知らない別世界のものである。そんなこと

を無意識に考えたためでもあろうか、この水準点ベンチマークの鋲の丸いあたまに不思議な愛着のようなものを感じてちょっとさわってみないではいられなかったのである。

水準点のすぐそばに木の角柱が一本立っている。もうだいぶ長く雨風にさらされて白くされ古びとげとげしく木理（もくめ）を現わしているのであるが、その柱の一面に年月日と名字とが刻してある。これは数年前京都大学の地球物理学者たちがここにエアトヴァスの重力偏差計をすえ付けて観測した地点を示す標柱だそうである。年々に何百人という登山者のうちで、こんな柱の立っ

ているのに気のつく人はいくらもないかもしれない。まして、その柱の意味を知る人はおそらく一人もないかもしれない。

小浅間（こあさま）への登りは思いのほか楽ではあったが、それでも中腹までひといきに登ったら呼吸が苦しくなり、妙に下腹が引きつって、おまけに前頭部が時々ずきずき痛むような気がしたので、しばらく道ばたに腰をおろして休息した。そうしてかくしのキャラメルを取り出して三つ四つ一度に頬張（ほおば）りながら南方のすそ野から遠い前面の山々へかけての眺望（ちょうぼう）をむさぼることにした。自分の郷里の土佐（とさ）なども山国であるからこうした

ながめも珍しくないようではあるが、しかし自分の知る郷里の山々は山の形がわりに単調でありその排列のしかたにも変化が乏しいように思われるが、ここから見た山々の形態とその排置とには異常に多様複雑な変化があって、それがここの景観の節奏と色彩とを著しく高め深めているように思われた。

　まわりに落ち散らばっている火山の噴出物にも実にいろいろな種類のものがある。多稜形（たりょうけい）をした外面が黒く緻密（ちみつ）な岩はだを示して、それに深い亀裂（きれつ）の入った麺麭殻（ブレッドクラスト）型の火山弾もある。赤熱した岩片が落下して表面は急激に冷えるが内部は急には冷えない、それが

徐々に冷える間は、岩質中に含まれたガス体が外部の圧力の減った結果として次第に泡沫(ほうまつ)となって遊離して来る、従って内部が次第に海綿状に粗鬆(そそう)になると同時に膨張して外側の固結した皮殻(ひかく)に深い亀裂を生じたのではないかという気がする。表面の殻(かく)が冷却収縮したためというだけではどうも説明がむつかしいように思われる。実際この種の火山弾の破片で内部の軽石状構造を示すものが多いようである。

それからまた、ちょっと見ると火打ち石のように見える堅緻(けんち)で灰白色で鋭い稜角(りょうかく)を示したのもあるが、この種のものであまり大きい破片は少なくもこのへん

では見当たらない。
厚さ一センチ程度で長さ二十センチもある扁平（へんぺい）な板切れのような、たとえば松樹の皮の鱗片（りんぺん）の大きいのといったような相貌（そうぼう）をした岩片も散在している。このままの形で降ったものか、それとも大きな岩塊の表層が剥脱（はくだつ）したものか、どうか、これだけでは判断しにくいが、おそらく後者であろう。こんな薄っぺらなものが噴出されたとしても、空中で衝突し合って砕けやすいであろうし、また落下の衝動でも割れないわけにはゆかないであろうと思われた。
その他にもいろいろな種類の噴出物がそれぞれにち

がった経歴を秘めかくして静かに横たわっている。一つ一つが貴重なロゼッタストーンである。その表面と内部にはおそらく数百ページにも印刷し切れないだけの「記録」が包蔵されている。悲しいことにはわれわれはまだ、その聖文字（ヒエログリフ）を読みほごす知能が恵まれていない。

数分の休息と三片のキャラメルで自分の体内の血液の成分が正常に復したと見えてすっかり元気を取りもどしてひと息に頂上までたどりつくことができた。

頂上にはD研究所のT理学士が天文の観測をするためにもう十数日来テントを張って滞在している。バン

ベルヒの天頂儀（ゼニステレスコープ）をすえ付けて天頂近く子午線を通過する星を観測してこの地点の緯度をできるだけ精密に測定しておく、そうして他日また同じ観測を繰り返して、この地点が火山活動の影響のためにいくらかでも移動するかどうかを験出しようというのである。

観測器械を入れたテントのそばには無線電信受信用のアンテナが張ってある。毎日午前十一時とかに東京天文台から放送される時報を受け取ってクロノメーターの時差を験するためである。

このテントから少し北に離れて住居用の長方形テントが張ってある。ここがＴ君と陸地測量部から派遣さ

れた二人の測夫と三人の仮の宿である。これからまた少し離れた斜面にヤシャブシを伐採して急造した風流な緑葉ぶきの炊事小屋が建ててある。三本の木の株で組み立てられた竈（かまど）の飯釜（めしがま）の下からは楽しげな炊煙がなびいている。小屋の中の片側には数日分の薪材（しんざい）に付近の灌木林（かんぼくりん）から伐（き）り集めた小枝大枝が小ぎれいに切りそろえ積みそろえられていかにも落ち着いた家庭的な気持ちを感じさせる。

　測量部の測夫たちは多年こうした仕事に慣れ切っていて、一方では強力（ごうりき）人夫の荒仕事もすると同時にまた一方ではまめやかな主婦のいとなみもするのである。

そうしてまた一方では観測仕事の助手としても役に立つという世にも不思議な職業である。年じゅう人の行かない山の中でこうした生活をして、陸地測量、地図作製という文化的な基礎仕事に貢献しているのである。

測夫の一人はもう四十年も昔からこの仕事をつづけているそうで、北はカラフトから南は台湾（たいわん）まで足跡を印しない土地は少ないのだそうである。テントの中で昼食の握り飯をくいながら、この測夫の体験談を聞いた。いちばん恐ろしかったのは奄美大島（あまみおおしま）の中の無人の離れ島で台風に襲われたときであった。真夜中に荒波が岸をはい上がってテントの直前数メートルの所まで

押し寄せたときは、もうひと波でさらわれるかと思った。そのときの印象がよほど強く深かったと見えて、それから長年月の後までも時々夢魔となって半夜の眠りを脅かしたそうである。また同じ島に滞在中のある夜琉球人（りゅうきゅうじん）の漁船が寄港したので岸の上から大声をあげて呼びかけたら、なんと思ったかあわてて纜（ともづな）をといて逃げうせ、それっきり帰って来なかったそうである。カラフトでは向こうの高みから熊（くま）に「どなられて」青くなって逃げだしたこともあるという。えらい大きな声をして二声「どなった」そうである。

テント内の夜の燈火は径一寸もあるような大きなろ

うそくである。風のあるときは石油ランプはかえって消えやすくていけないそうである。
なんの気なしにもらって飲んだお茶の水は天気のいい時は峰（みね）の茶屋（ちゃや）からここまでかつぎ上げなければならぬ貴重なものである。雨のときはテントの屋根から集めるという。

晴夜が三晩もあれば、観測は終了するはずであるが、ここへテントを張ってから連日の雨か曇りでどうしても星が見えない。しかしいつなんどき晴れるかもしれないから、だれか一人は交代の不寝番で空を見張っていなければならない。燈火が暗いから読書や書きもの

もぐあいがよくない。ラジオを聞いたらいいではないかといったら、電池を消耗するから時報と天気予報以外は聞かないのだという。これがアメリカあたりの観測隊であったら、おそらく電池ぐらいかなり豊富に運び上げて、その日その日のラジオで時を殺し、そうしてまたおそらくポータブルのジャズでステップを踏み、その上にうまいコーヒーで午後の一時間を陽気に朗らかに楽しむではないかと思う。

　しかしわが貧乏国日本の忠実な少壮学者は貧乏な大学の研究所のために電池のわずかな費用を節約しつつ、たくあんをかじり、渋茶に咽喉（のど）を潤してそうして日本

学界の名誉のために、また人間の知恵のために骨折り働いているのである。

ろうそくをはい上がって行く一匹の足長蜘蛛（あしながぐも）がある。意外な人間の訪客に驚いているであろう。おそらく経験のない蠟（ろう）のなめらかな表面には八本の足でも行き悩んでいるようであった。

こんな所でも蠅（はえ）が多い。峰（みね）の茶屋（ちゃや）で生まれたのが人間に付いて登って来たものであろうか。焦げ灰色をした蝶（ちょう）が飛んでいる。砂の上をはっている甲虫で頭が黒くて羽の煉瓦色（れんがいろ）をしているのも二三匹見かけた。コメススキや白山女郎花（はくさんおみなえし）の花咲く砂原の上に大きな豌豆（えんどう）

ぐらいの粒が十ぐらいずつかたまってころがっている。蕈（きのこ）の類かと思って二つに割ってみたら何か草食獣の糞（ふん）らしく中はほとんど植物の繊維ばかりでつまっている。同じようなのでまた直径が一倍半くらい大きいのがそろって集団をなしている。

　この二種の糞を拾って行って老測夫に鑑定してもらったらどちらもうさぎの糞で、小さいのは子うさぎ、大きいのは親うさぎのだという。さすがに父だか母だかは糞ではわからないらしい。このうさぎを捕獲すればテント内の晩餐（ばんさん）をにぎわすことができるがなかなか容易には捕れないそうである。出歩く道がわかればわ

なを掛けるといいそうであるがその道がなかなかわからないと言う。それはとにかく、こんなはげ山の頂にうさぎが何を求めて歩いているのか、また蜘蛛(くも)や甲虫や蝶などといかなる「社会」を作っているのか愚かな人間には想像がつかないのである。

帰りにはT君がふもとまで送って来てくれた。途中で拾った小さな火山弾の標本をおみやげにもらった。T君の住まいは玄関から座敷まで百何十メートル登らなければならないのである。観測の成効を祈りつつ別れをつげた。

往路に若い男女の二人連れが自分たちの一行を追い

越して浅間のほうへ登って行った。「あれは大丈夫だろうか」という疑問がわれわれ一行の間に持ち出された。しかし、男のほうはもちろん女のほうもすっかり板についた登山服姿であり、靴などもかなり時代のついた玄人のそれであり、またそれを踏みしめ踏みしめ登って行く足取りもことごとく本格的らしいので、あれは大丈夫だろうということになったのであった。われわれが小浅間の頂上に達したころはこの二人はもうかなり小さく見えていた。われわれのおりたころにはたぶん頂上近くまで登っていたことであろう。

その夜星野温泉へ帰って戸外へ出て空を仰いだら久

しぶりで天頂に星がきらきら輝いているのが見えた。T君が今夜は一晩星をねらいながら明かすことであろうと思って寝床にはいった。

寝ながら、T君の小浅間頂上のテント生活と、近代青年男女の間に流行するいわゆるキャンプ生活との対照を思い浮かべてみた。後者のままごと式の野営生活もたしかに愉快でもありまたいろいろな意味で有益ではあろうが、しかし、前者の体験する三昧（ざんまい）の境地はおそらく王侯といえども味わう機会の少ないものであって、ただ人類の知恵のために重い責任を負うて無我な真剣な努力に精進する人間にのみ恵まれた最大のラキ

ジュリーではないかという気がするのであった。

そんなことを考えながら、Ｔ君の山男のような蓬髪（ほうはつ）としわくちゃによごれやつれた開襟（かいきん）シャツの勇ましいいで立ちを、スマートな近代的ハイカーの颯爽（さっそう）たる風姿と思い比べているうちに、いつか快い眠りに落ちて行ったことであった。

（昭和十年九月、東京朝日新聞）

底本：「寺田寅彦随筆集　第五巻」岩波文庫、岩波書店
　　１９４８（昭和23）年11月20日第１刷発行
　　１９６３（昭和38）年６月16日第20刷改版発行
　　１９９７（平成９）年９月５日第65刷発行
入力：（株）モモ
校正：多羅尾伴内
２００３年11月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。